

令和5年度

# FD・SD活動報告書

- 1 FD・SD研修会
- 2 FD会議
- 3 FDアンケート
- 4 授業リフレクション
- 5 教育相談Day
- 6 授業相互参観

鹿児島大学大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻  
〔 教職大学院 〕

## 1 FD・SD研修会

教育学部と連携して合同の研修会を2回開催した。

	期日	内容
第1回 FD・SD 研修会	9月20日(水)	「各専門分野の特質を基盤とした教育学部ならではの学習機会の提供」 講演1：(障害児教育) 「理論と実践をつなぐ授業～多面的・多角的に考えるための仕掛けと五感を通じた学びの拡大・深化～」 講演2：(生物技術学) 「学生に身に付けてほしい専門性と学習場面の工夫」
第2回 FD・SD 研修会	2月21日(水)	1) 授業アンケート、授業紹介・参観について 2) 学生FD委員会シンポジウムについて 3) 教育学部FD講演会報告について 4) 各種アンケートについて 5) 教師教育開発センターとの連携について 6) セミナーのまとめ(教育実践総合センター長)

## 2 FD会議

FD会議とは、教職大学院のFD・SD活動のあり方を検討するとともに、活動に対する省察を行うための場である。毎月1回開催しており、教職大学院の専任教諭は全員参加している。内容としては、教育相談Dayを始めとする個々の学生の状況把握、FDアンケート結果の共有と改善策の検討、授業リフレクションの発表とその協議等であり、本教職大学院の日常的なFD活動を支える機能を果たしている。

各回で扱った内容は次の通りである。

回	実施日	内容
1	5月15日(月)	(1) 専攻として検討すること ・ 修了生調査結果(2期生分)を基に協議 (2) 教育相談Day, オフィスアワーの確認 (3) 卒業後キャリア支援について (4) FDアンケート・修了時アンケート ・ 年間スケジュール, 交流会への反映 (5) 授業リフレクションについて ・ 相互の授業内容理解とカリキュラム・マネジメント、 ・ 教職大学院におけるベストティーチャー選考
2	6月19日(月)	(1) 教育相談Dayからの情報共有・検討 (2) 授業リフレクションの確認 ① T1の授業リフレクションをグループで行う。 ② リフレクションシート: コアスタッフの様式

3	7月24日(月)	(1) M2中間成果報告会時の修了生交流会案の確認 (2) 第1タームFDアンケート内容の検討(各委員会ごと) (3) 教育相談Dayの要望・質問への対応
4	8月25日(金)	第7回教職大学院 交流会 修了生と在學生、教員スタッフが気軽に相互交流できる場を設定し、互いの状況を確認し今後の取組について協議した。
5	9月25日(月)	(1) FDアンケートの回答状況の確認 (2) 授業(講義)リフレクションの科目確認 (3) オフィスアワーの確認と周知
6	10月16日(月)	(1) 第2タームFDアンケート結果分析・検討 履修指導について 実習のバランスについて (2) 授業(講義)リフレクション ・ 説明科目「授業研究の理論と実践」 ・ 小グループでの意見交換 (3) 教員採用試験結果状況
7	11月20日(月)	(1) M2の次年度OJTについての検討 (2) 「高度化I」における実証授業、組織的業務について
8	12月18日(月)	(1) 修了生アンケートについて (2) 教育相談に出された内容について (3) 採用試験に向けて (4) M2次の実習校の希望について
9	1月22日(月)	(1) 第3タームFDアンケートについて ・ 教職課題研究Iの教員・院生の対話時間確保について ・ 重点IIにおける実習について(複数) ・ 小免Pの履修確認・実習調整について (2) 成果報告会に伴う修了生交流会について
10	2月19日(月)	(1) 教職大学院交流会について (2) 修了生アンケートについて (3) 大学教育改革にむけた取組の実施状況について (4) 「授業リフレクション」について (5) ベスト・ティーチャー賞の選考について
11	3月2日(土)	第8回鹿児島大学教職大学院交流会 (1) 「教職大学院での学びと現在の取組」修了生発表 (2) 修了生とM1M2のグループ協議 ・ 成果報告会のふりかえり、今後の取組 (3) 教員代表コメント
12	3月18日(月)	(1) 第4タームFDアンケート結果分析・検討 (2) ベスト・ティーチャー賞の選考について (3) 「授業リフレクション」について

### 3 FD アンケート

教職大学院の学生の学習や生活の状況及び要望等を把握するため以下の要領でアンケートを実施し、指導改善に役立てている。

#### (1) 実施期間

ターム	期間
第1ターム	6/10～6/17
第2ターム	8/5～8/15
第3ターム	12/13～12/20
第4ターム	2/10～2/17

#### (2) 無記名のアンケート方式

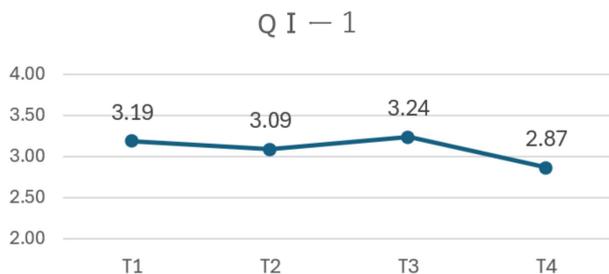
得点化してタームごと平均点を算出

- |                   |
|-------------------|
| 4点：とてもよく当てはまる     |
| 3点：どちらかという当てはまる   |
| 2点：どちらかという当てはまらない |
| 1点：まったく当てはまらない    |

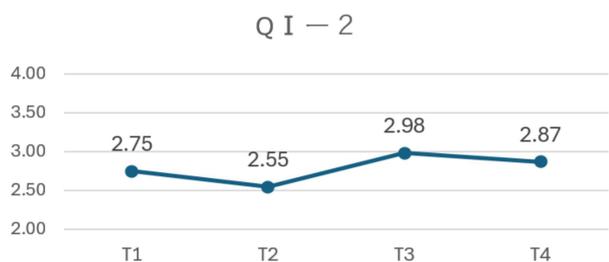
### ■ 1年生の結果 (回答者数 第1ターム16人 第2ターム11人 第3ターム21人 第4ターム14人)

#### 【I 授業と実習の全体について】

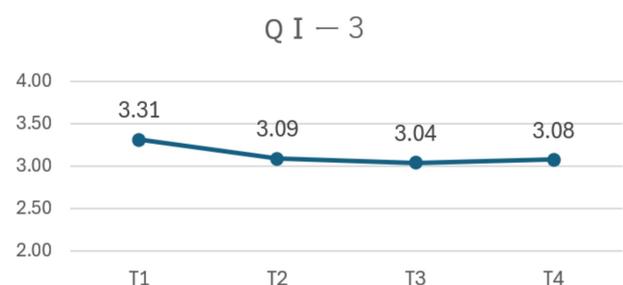
1) 授業と実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか。



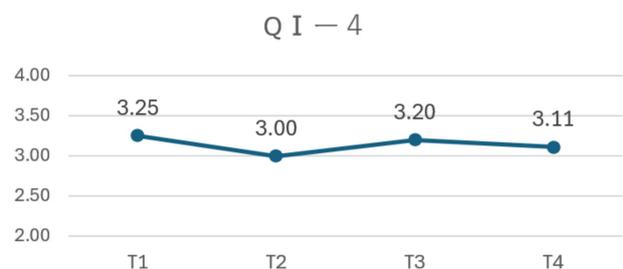
2) 授業と実習の時間上のバランスは適切でしたか。



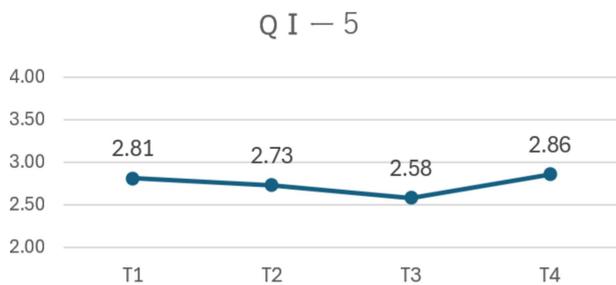
3) 教育課程は、新しい学校づくりの有力な一員となりうる新人教員ならびにスクールリーダー（中核的中堅教員）の養成を果たすのにふさわしい内容でしたか。



4) 教育内容は、教育現場における課題を積極的に取り上げ、その解決に向けた内容になっていましたか。



5) 履修指導は適切でしたか。

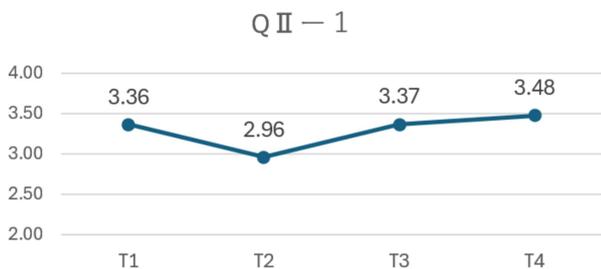


6) 施設と設備は利用しやすかったですか。  
(自由記述のため割愛)

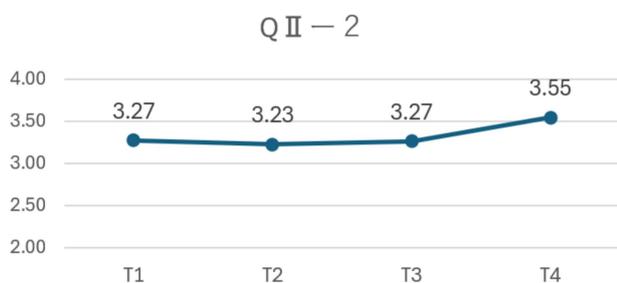
7) 現職と学部新卒と一緒に学べるように  
授業が組まれていますか、いかがですか。  
(自由記述のため割愛)

【Ⅱ 必修科目について】

1) 授業内容はあなたのニーズにそった  
ものでしたか。



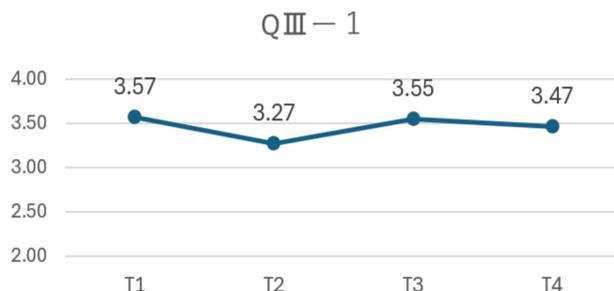
2) 教員の指導体制は適切でしたか。



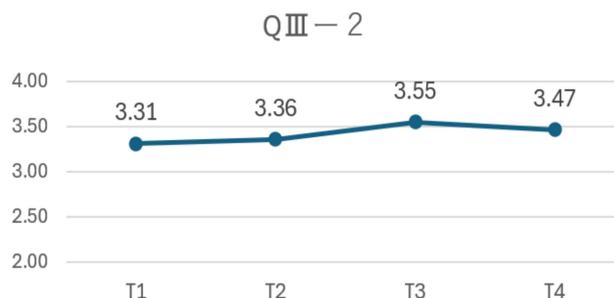
3) 満足している点と改善してほしい点があり  
ますか。(自由記述のため割愛)

【Ⅲ 選択科目について】

1) 授業内容はあなたのニーズにそった  
ものでしたか。



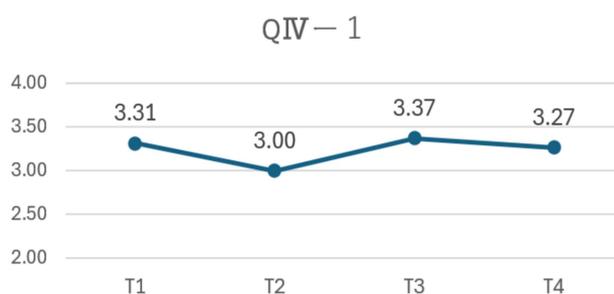
2) 教員の指導体制は適切でしたか。



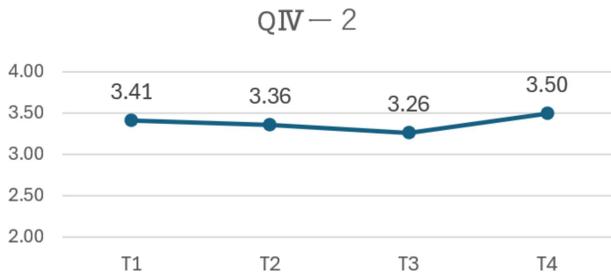
3) 満足している点と改善してほしい点があり  
ますか。(自由記述のため割愛)

【Ⅳ「教職課題研究Ⅰ」について】

1) 授業内容はあなたのニーズにそった  
ものでしたか。



2) 教員の指導体制は適切でしたか。



3) 満足している点と改善してほしい点がありますか。(自由記述のため割愛)

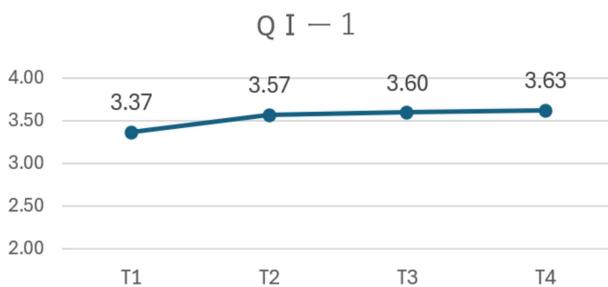
【V 授業以外及び実習以外での教員の対応について】

(自由記述のため割愛)

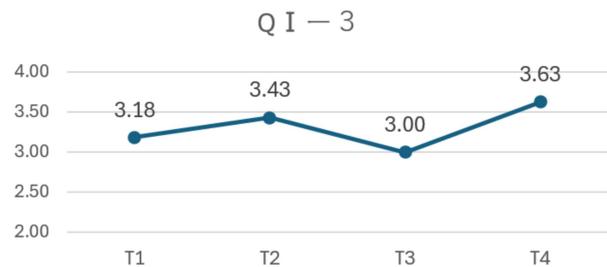
■ 2年生の結果 (回答者数 第1ターム 16人 第2ターム 11人 第3ターム 21人 第4ターム 14人)

【I 授業と実習の全体について】

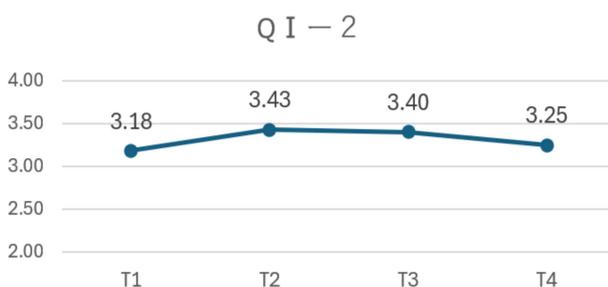
1) 授業と実習はシラバスの趣旨に沿った内容でしたか。



3) 教育課程は、新しい学校づくりの有力な一員となりうる新任教員ならびにスクールリーダー(中核的中堅教員)の養成を果たすのにふさわしい内容でしたか。



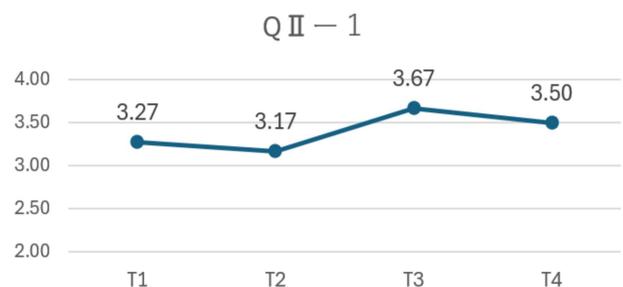
2) 授業と実習の時間上のバランスは適切でしたか。



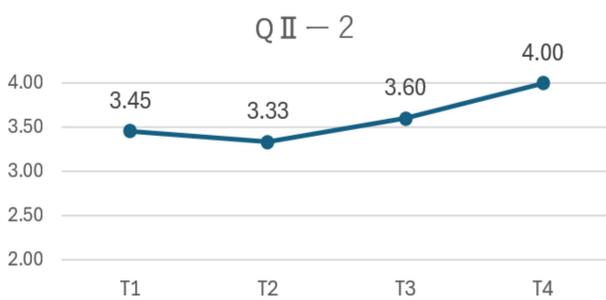
4) 満足している点と改善してほしい点がありますか。(自由記述のため割愛)

【II 授業について】※「教職課題研究II」以外

1) 授業内容はあなたのニーズにそったものでしたか。



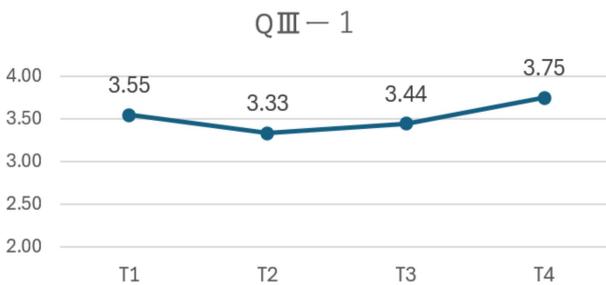
2) 教員の指導体制は適切でしたか。



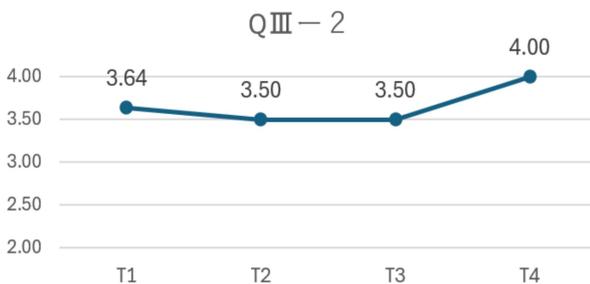
3) 満足している点と改善してほしい点がありますか。(自由記述のため割愛)

【Ⅲ 「教職課題研究Ⅱ」について】

1) 授業内容はあなたのニーズにそったものでしたか。



2) 教員の指導体制は適切でしたか。



3) この授業では訪問授業や大学での授業を行っていますが、満足している点と改善してほしい点がありますか。

(自由記述のため割愛)

4) その他で満足委している点と改善してほしい点がありますか。

(自由記述のため割愛)

## 5 授業リフレクション

講義名	学校を基盤とするカリキュラム開発
担当者名	廣瀬・徳田(~2022)・川上・福森・内(2023~)
講義の目標	現職：事例を整理し、その多様性や特徴を理解・分析できる
	ストマス：教育課程の具体的な要点や手続きを理解し、その開発力量を高める
	共通：カリキュラム開発等の諸理論や、その意義、要点を理解できる

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	・みなし教員と連絡をとり、各自の紹介事例について、準備をお願いする
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共通学習事項について、ジグソー法により個々の関心等を踏まえた学習活動になるように留意した</li> <li>・ストマスは主に附属学校のみなし教員にインタビューを実施したが、その結果を図表等に整理するよう促した</li> <li>・個人で調べたり、レポートを作成したりする時間を講義の後半部分に設け、個別に、院生の相談に応じるように留意した</li> </ul>
プチ・リフレクション	・カリキュラム・リーダーシップの理論に関する理解を深めつつ、文献読解やインタビューなどの学び方（研究にかかる初歩的な活動）についても意識しつつ、レポートの執筆を進めていた。文献の内容についての質疑や、先行事例に関する情報共有などを、個別に相談に乗る時間にて進めていたが、全体にフィードバックした方がよい部分もあったように思う。
次年度の改善点	・個々の相談事項を必要に応じて全員と共有する仕組みについて、授業計画に記述するようにしたい
教育課程（履修案内等への変更事項）	・特記事項なし

講義名	特色ある教育課程とそのデザイン
担当者名	廣瀬真琴、徳田清信、高瀬和也、上仮屋祐介、中原大士、吉川祐一
講義の目標	現職：カリキュラム（複数学年・教科横断的）を、事例や理論を活用してデザイン・修正できる
	ストマス：カリキュラム（単元レベル）を事例や理論を活用してデザイン・修正できる
	共通：特色あるカリキュラムの意義、要点、そのデザイン方法を理解できる

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	
講義の工夫点	<p>昨年度同様、形態：年度末のため、各自の学びの総括を図ることをねらい、個別学習を基本とした</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：大学院の1年間の学びを総括するトピック（特別支援、ICT、鹿児島県の教育の特色など）学習を行った</li> <li>・実習（特に重点II）の学びとを本講義の内容とを接続するパネルディスカッションを行った</li> <li>・ICT：広く浅くではあるが小学校低学年～高校まで使えるプログラミング教材を体験させられた。来年度からは対面の制限がなくなるため、より充実した体験活動にしたい。</li> </ul>
プチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第4タームに開講されているため、1年間の学びを総括したり、振り返ったりする上で重要となるトピック（ICT、特別支援、県の教育的特色）については、大学院のカリキュラムとの整合性から、今後も継続したい。また、個々人の探究を整理する講義後半の活動では、院生の個別相談に応じる時間を設けているものの、受講生によって、相談が一度もないケースがある。この点を改善したい。</li> </ul>
次年度の改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上述した院生の個別相談の機会を工夫し、学習を深められるように支援したい</li> </ul>
教育課程 （履修案内等への変更事項）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特記事項無し</li> </ul>

講義名	特別支援教育とカリキュラム・マネジメント
担当者名	岩本伸一，小久保博幸，上仮屋祐介
講義の目標	現職 ①授業研究の場においてファシリテーターを務めることができる。 ②所属校のカリキュラム・マネジメントの現状と問題点を挙げる ことができる。
	ストマス ①授業研究の方法論について説明ができる
	共通 ①特別支援教育に関連した学校教育法制の概要を説明できる。 ②特別支援学校学習指導要領に基づいた学習指導案や個別の指導計画の作成ができる。 ③カリキュラム・マネジメントポイントについて説明ができる。

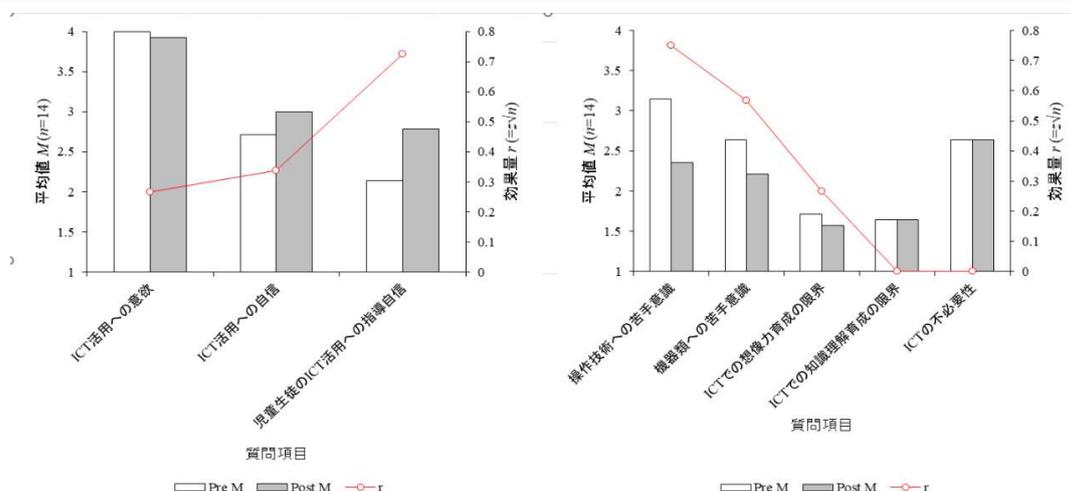
年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当者3人によるオムニバス型講義（各5回ずつ）を行ったこと。</li> <li>・テキストを活用して理論を学ぶ時間を確保し，継続して行ったこと。（代表一人によるレジュメを用いた発表）</li> <li>・「特別支援教育高度化実践実習Ⅰ」と関連を図り，検証授業，授業研究を行ったこと。</li> <li>・授業研究会時に受講生以外の院生にも協力を得たこと。</li> </ul>
プチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援教育高度化実践実習Ⅰとのさらなる関連を図る。</li> <li>・現職教員学生については，在籍校における教育課程や授業研究等の分析をさらに充実させたい。</li> </ul>
次年度の改善点	・受講生が少ない場合の内容・方法を検討する必要がある。
教育課程 （履修案内等への変更事項）	

講義名	教材研究、指導方法、評価に関する実践的課題とその改善
担当者名	溝口 和宏・假屋園昭彦・宮崎幸樹・原田義則・
講義の目標	現職： ・各校における授業改善を推進するための児童・生徒の発達に即した教材研究、指導方法、評価の在り方について考察し、モデルとなる単元デザインや評価法を構想することができる。
	ストマス： ・児童・生徒の発達に即した教材研究、指導方法、評価の在り方について理解し、単元デザインや評価方法を構想することができる。
	共通： ・各教科・領域の中から教材を選択し、ユニバーサルデザイン、アクティブ・ラーニング、小中一貫教育、評価等の視点を踏まえた単元を開発し、単元構成や評価方法の意図やねらいについて論理的根拠をもって説明することができる。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・230406：本年度の進め方（授業全体のデザイン）について主担当者から担当者教員にメールで連絡・協議した。</li> <li>以降は、授業のスケジュールに沿って、毎回の授業の構成・展開をメールで連絡した。</li> <li>・230810：最終の成績について確認した。</li> </ul>
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体的な授業計画は昨年とほぼ同様の構成で進めた。最終課題の発表会については、ポスターを作成し対面で実施した。課題の進行状況を踏まえて、発表会日時を8月とし十分な作成時間を確保するようにした。小中一貫教育については、オンラインで一貫校の校長や教諭より、通常の学校とは異なる小中一貫校ならではの学校経営の工夫、教育課程編成、実際の授業の様子など様々な観点から説明を受け、学校側からの説明や質疑の時間も設けるようにした。</li> </ul>
プチ・リフレクション	昨年と異なり、最終発表を対面での実施としたため、それぞれの発表について、どのような質疑が展開されているか、俯瞰しやすくなった。
次年度の改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受講者数や属性により進め方が変動する可能性があるが、基本的方向性は踏襲したい。</li> </ul>
教育課程（履修案内等への変更事項）	特になし

講義名	ICT活用と授業デザイン
担当者名	高瀬 和也, 徳田 清信
講義の目標	現職
	ストマス
	共通 1.ICTを活用した教育の目的と意義に関する知識理解の向上 2.ICTを活用した教育に関する実践的な指導力の向上 3.ICTを活用した教育への見方・考え方の深化

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・20230412：内先生お打ち合わせ</li> <li>・20230426：三島村校長会で協力打診</li> <li>・20230803：三島村各学校・教委へのお礼と実践報告</li> </ul>
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生を5班にわけ、三島村へ向けて遠隔授業を1時間行った。</li> <li>・班構成は、ストマス現職や教科を敢えてランダムにした。</li> <li>・三島村各学校との打ち合わせは学生に行わせた。</li> <li>・プロジェクト遂行のガイドを配布した。</li> <li>・最新の情報を踏まえて講義内容を精選した。</li> </ul>
プチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高瀬担当講義は3点、内担当講義が3点と、実務家・研究者のバランスよく講義を構成できた。</li> <li>・学生には、講義内のディスカッションはもちろん、外部校へ連絡をとり打ち合わせを重ね調整していくことを体験させた。</li> <li>・感想やアンケート結果を見る限り、ICTに関する苦手意識が軽減されたことが窺えた。</li> <li>・授業内容や目標に合わせたICTの取捨選択がスムーズになったと見える。</li> <li>・昨年に比べ、プロジェクト遂行のガイドを示したことにより、負担感や不安感が軽減されたように見える。</li> <li>●しかし、受講生によると、先方の教員との刷り合わせが上手くいかなかった班が複数見られた。その要因は先方側（プロジェクトへの理解不足、他業務）にも大学側（連絡不足、理解度把握の不足）にも考えられる。</li> <li>●15回中およそ10回を遠隔授業プロジェクトに費やすため、プロジェクトを進める以外の他のことはほとんど学べない構造になっている。</li> </ul>
次年度の改善点	<p>課題は大きく分けて2点。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●プロジェクト進行の課題 → 今後は、先に授業案をつくりあげて、先方に選んでもらうという形式でやってみようと思う（例えば、つくる(2)+調整・準備(3)+実践(1)+分析(1)など）。</li> <li>●本授業の限界 → 授業実践に時間を割くあまり、これからの情報活用や教育データ分析についてじっくり見聞きしたり、考えたり議論したりする時間はほとんどない。次世代などの別授業で展開するほかないか？</li> </ul>
教育課程変更	・



講義名	学校における生徒指導の実践と課題
担当者名	假屋園昭彦・関山徹・島義弘・鮫島俊之・初村多津子
講義の目標	現職：生徒指導の諸課題について多面的に理解し省察するとともに、コーディネーターとして組織的に実践できる。
	ストマス：生徒指導の具体的課題について理解し省察するとともに、組織の一員として協働的に実践できる。
	共通：生徒指導の諸課題について理論的枠組みと関連づけて理解し省察するとともに、組織的に実践できる。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	本講義は集中講義である。そのため、できるだけ多くの院生が受講できるように開講時期について協議した。その結果、本年度から通常講義と実習と重複せず、しかも受講しやすい時期として8月から9月にかけて開講することとした。
講義の工夫点	理論面と実践面のバランスを考えた。単なる事例検討にならないように工夫した。実践を支えるのは理論であること、および経験則に依存した生徒指導にならないことが大切であることを受講者には伝えた。
プチ・リフレクション	学部新卒生はどうしても生徒指導経験が浅い。したがって学部新卒生に講義内容についての興味関心をもろうための工夫が必要である。できるだけ実践例を取り入れながら、院生の興味関心を高めながら進めたい。
次年度の改善点	できるだけ多くの院生に受講してもらうことができる時期の選定を行う。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	なし

講義名	教育相談の方法と実践
担当者名	関山徹・有倉巳幸・鮫島俊之・初村多津子
講義の目標	現職：支援チームを組織して具体的課題の解決にあたりとともに、学校全体としての教育相談を計画・運営できる
	ストマス：教育相談で求められる共感的な関わり方を理解するとともに、それを支援チームの一員として具体的課題の中で実践できる
	共通：一人ひとりの児童生徒の個性や発達の違いを考慮した教育相談活動を組織的かつ計画的に行うことができる

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 20230329：次年度の構成・日程について担当者間で共通理解</li> <li>・ 20230526：内容や授業方式について担当者間で共通理解</li> <li>・ 20230620：みなし専任実務家教員との内容・段取りの確認</li> <li>・ 20230622：みなし専任実務家教員との内容・段取りの確認</li> </ul>
講義の工夫点	・ 生徒指導提要改訂版で新たに上げられたB P Sモデルについて、仮想事例の検討を絡めて実践的理解を深めるようなデザインに改めた
プチ・リフレクション	・ チーム支援の箇所については、ただ支援者の幅を広げるだけでなく、支援者の支援についても効果的に行えるよう、チーム支援の構造化・組織化についての意識が高まるような観点をより示していきたい
次年度の改善点	・ 生徒指導提要改訂版と授業内容との対応関係を明確にしていく
教育課程 (履修案内等への変更事項)	

講義名	自律的学校経営の理論と実践
担当者名	有倉巳幸 小林俊一郎
講義の目標	<p>現職 1：これからの学校に求められるマネジメントの手法や先行事例にみられる成功要因を理解できる</p> <p>2：自律的学校経営に求められる管理職ならびに教員の力量について、専門的な見識を獲得して、その中身と育成方法を論じることができる</p>
	<p>ストマス 1：公教育の果たす役割と自律的学校経営に求められる要件を理解できる</p> <p>2：学校組織の特質と自律的学校経営の実現において求められる教員の役割について理解できる</p>
	<p>共通 1：公教育および学校教育が現在直面している種々の課題についてその特徴を把握できる</p> <p>2：他者と協働しながら探究を進め、対話をファシリテートしていくことができる</p>
年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	・授業計画、資料の配布について担当者間で共通理解、発表担当の学生は事前に担当教員に相談
講義の工夫点	毎回、1～2週間前にグループの事前打ち合わせを行って、レジメの内容を確認し、修正があれば行い、授業前にmanabaに上げられていた。授業後に発表グループに、うまくファシリテートできていたかを振り返らせることができていた。
プチ・リフレクション	今年度から授業担当者として小林先生に入ってもらった。毎回、学生グループがしっかりと準備をしてくれていたのが、活発な意見交換ができていた。最後の方で、小林先生と私が授業全体を通してコメントをするが、校長のときの経験を踏まえて的確なコメントをしていただいたので、私は理論的な立場からコメントを補強することができた。
次年度の改善点	・テキストが絶版になっていたのが、電子図書で購入してもらうようにした。ただ、学生の中にはうまくテキストを入手していた者もいた。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	・そろそろ、扱うテキストの内容を刷新する必要があると思われる。

講義名	鹿児島における学校教育と教員のあり方
担当者名	小屋敷浩昭、小林俊一郎
講義の目標	現職 本県の教育上の諸課題を踏まえながら、教育力向上のための対応力を養成し、ファシリテーションできる。
	ストマス 本県の教育上の諸課題を分析し、対応策を考察できる。
	共通 ・本県の特色ある教育施策や教育課題等の内容を理解する。 ・本県の教育課題の対応策等について、ユニバーサルデザイン、ICT、アクティブ・ラーニング、少人数教育、小中一貫教育等の視点を踏まえながら考察し、提言することができる。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2023 4月：講義の形態、内容等について、担当者間で共通理解</li> <li>・2023 7月：県教委へ依頼公文の発出</li> <li>・2022 8、9月：県教委、訪問学校との日程調整 など</li> </ul>
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形態：原則、対面で実施</li> <li>・討議等は、ストマスと現職を一緒にしたり、別々に分けたりして実施した。</li> <li>・テーマごとにストマスと現職を一緒に班分けし、プレゼン発表</li> </ul>
プチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本県教育の特色、教育課題、教育行政等に関する内容については、現職も理解していないことがあり、ストマスを含め、興味・関心は高いものがある。</li> <li>・今後、より効果的なデータ、資料等の改善の必要がある。</li> <li>・教育施策提言の班別発表の役割を工夫する必要がある。</li> </ul>
次年度の改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問等については、県教委や学校と連絡を密にし、より充実した内容となるよう時期を設定したい。</li> </ul>
教育課程 (履修案内等への変更事項)	特になし。

講義名	インクルーシブ教育における教師の専門性
担当者名	片岡美華・岩本伸一
講義の目標	現職教員学生 本授業で得た知識を活用して教師の専門性向上に貢献できる態度を養う（具体的プランを出せる）。
	ストマス インクルーシブ教育に関して最新の情報や知見に対して常に関心をもち学び続ける態度を養う（自己目標を立てられる）。
	共通 1. インクルーシブ教育時代において教師に求められる資質や専門性について理解し表現できる。 2. 自己分析を通して現在の力量と課題を把握し、具体的解決方法を言える。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2023年4月：授業計画について担当者間で共通理解</li> <li>・2023年5月：グループ編成についての検討</li> <li>・2023年6月：グループ発表に向けた確認</li> </ul>
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インクルーシブ教育に関する歴史的な観点、国内外の現状についての諸資料を基に、各々が自己分析を通して課題を見出し、問題解決の方策を検討できるような授業構成とした。特に、指導者を含め率直な意見を交わせる討議の場を重視した。</li> <li>・ストマスと現職教員学生が混在するグループを編成し、専門性のとらえ方とその向上のための方策についてまとめ、発表・共有する場を設定した。</li> <li>・教育現場での専門性向上のための取組について理解を深めるために、附属特別支援学校の職員研修を参観する機会を設定した。</li> </ul>
プチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現職3人、ストマス5人、うち特別支援プログラムが1人という構成であった。特別支援教育の経験や免許教科・校種に関わらず、各々が自我関与を高く意識できていた。特にグループでの活動は、KJ法等を取り入れながら、全員が意欲的に参加し、充実した発表ができた。</li> <li>・国内だけでなく諸外国の実情を紹介する文献・論文等を提示したことで、我が国のインクルーシブ教育における現状や課題を議論することへの意識が高まったと思われる。</li> </ul>
次年度の改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現職とストマスの知識や経験が大きく異なるため、資料の提供や協議の内容等を更に工夫する必要がある。県内の学校や附属学校での先進的な取組と自校（現職）や実習校（ストマス）と比較しながら、同僚・メンター・集団・組織としての実際の・具体的な働きかけを検討する場を、更に充実させたい。</li> </ul>
教育課程 (履修案内等への変更事項)	・特になし

講義名	学校教育におけるデータ分析とその活用
担当者名	假屋園昭彦
講義の目標	現職：教育データの正しい解釈の仕方および分析方法を習得する。そのうえで教育実践に対するデータの活用のあり方を習得する。
	ストマス：統計学に基づいたデータ分析の理論と分析方法を習得する。学校現場で教育データの活用方法を習得する。
	共通：教育データを適切に分析し、エビデンスとして用いることができる。研究目的に応じた計画を立案し、データ収集および分析方法を習得する。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	研究の基本的な考え方、倫理面での注意を最初に扱った。そのうえで研究計画の立案（文献の読み方・仮説の立て方・データ分析の方法・結果の解釈の方法）についての講義計画を作成した。データ分析の演習用の練習用資料を作成した。また質問紙調査の集計の仕方を扱った。
講義の工夫点	自力で基本的なデータ分析ができることを具体的な目標とした。そのため統計学の基礎理論と理論を使った実際のデータ分析の実習の二本立てを一つのユニットとして、単元を構成した。講義に際しては、当日の講義の振り返りおよび前回までの振り返り（復習）を必ず取り入れ、知識と技術が受講者の中に確実に蓄積されることを目指した。
プチ・リフレクション	データ分析はどうしても数字を扱う。そのため数字に対して苦手意識をもっている受講者が一定数見られる。またいわゆる文系教科や現職はデータ分析の重要性を認識していないケースもみられた。これらのケースへの対応方法が今後の課題である。
次年度の改善点	「プチ・リフレクション」に記述した点に向けて、講義の水準を見直す可能性についても考える必要がある。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	なし

講義名	社会科、地理歴史科指導法の開発と省察（選択）
担当者名	溝口 和宏・福井 駿
講義の目標	現職： 社会系教科教育やシチズンシップ教育に関する先行研究や実践等からの理論的・方法的知見をもとに、これまでの実践における教科観や児童・生徒観について省察し、実践上の課題を明確化するとともに、児童・生徒の資質・能力の育成の観点から改善の方向性を説明し、改善の具体的な方法について提案できる。
	ストマス： 「共通」と同じ
	共通： 社会系教科教育やシチズンシップ教育に関する先行研究や実践等からの理論的・方法的知見をもとに、教育実習での授業など自己の実践を省察し、実践上の課題を明確化し、改善の方向性や具体的な方法について説明することができる。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・230402：本年度の進め方（授業全体のデザイン、講読論文の選択方法）について担当者間で共通理解</li> <li>・230512：中間振り返り、後半の進め方について担当者間で協議</li> <li>・230707：最終課題について協議</li> </ul>
講義の工夫点	<p>・形態：昨年同様に受講生が前半と後半で2回、選択した論文について報告・協議する形を取った。前半は自身の関心あるテーマで論文を選択・協議した。中間振り返りの回では、前半の論文キーワードをもとに、院生が協議して、後半の論文選択のテーマを設定した。テーマは、論文選択の目安となる程度には焦点化したテーマを設定するようにした。後半は、焦点化したテーマに沿った論文を読み進めながら、それらをふまえた、実践や調査の開発可能性について協議を進めた。前期に読み進めた全ての論文から、後期の開発や調査に活かせるような学びを整理し、探究したいテーマや開発・調査の方法を検討する課題とした。報告の際は、レジュメに盛り込む項目を予め示しながら、報告を行わせるようにした。</p>
プチ・リフレクション	<p>昨年度と異なり全員ストマスの受講者であった。個々の学生が自身の関心のもとに論文を選択してはいるものの、他者の選択した論文からも意欲的に学び取ろうとする高い意欲は見られた。学生の関心として、実践への志向性の高い学生と、研究上の分析概念や方法に強い関心を示す学生、複数教科の免許を持つことから他教科との比較を意識する学生がおり、協議の際も、多様な視点から論文を検討することができた。</p>
次年度の改善点	<p>・受講者数や属性により進め方が変動する可能性があるが、基本的方向性は踏襲したい。</p>
教育課程 （履修案内等への変更事項）	特になし

講義名	特別の教科道德の授業デザイン論
担当者名	假屋園昭彦
講義の目標	現職：これまでにはない新しい授業デザインを考え、開発し、職場で実際に実践してもらう水準を目指す。また道德的価値理解の理路およびそのための発問開発を目指す。
	ストマス：道德の基本的な授業展開を習得する。さらに道德的価値理解を目指した発問作成の理路を習得する。
	共通：授業デザイン構築に必要な三つのキーワード（価値のものさし、抽象化、自問自答）の理論と実践面を習得する。
年	2023（R5）
講義準備や打ち合わせのメモ	単なる授業スキルの紹介にならないため、大学院レベルの水準を維持するため以下の準備を行った。まず授業で扱う道德的価値（親切、誠実、勇気などの概念）を学術的に捉えるため、心理学、哲学、倫理学の知見を講義の中に取り入れた。さらにこれらの知見から必然的に構成される授業デザインと発問を策定した。これらの授業デザインと発問を講義の中で紹介した。担当者自身が自らの研究の中で開発した授業デザインや発問は、自らの研究成果として講義のなかでも紹介した。
講義の工夫点	一方的な講義にならないように、実際の道德の授業形式で進めた。院生に児童生徒役になってもらい、模擬授業形式で実施した。模擬授業の各学習活動に際して解説を加え、院生の意見を取り入れながら、授業デザインの開発活動を行った。
プチ・リフレクション	道德については院生の間でも力量に差が見られた。そのため基本的な箇所は、その都度、学習指導要領解説を用いて確認しながら進めた。できるだけ実際の授業イメージを描くことができるように務めた。
次年度の改善点	学習指導要領解説レベルの基本的内容と新たな授業デザイン開発レベルの実践的内容とのバランスを考えながら進めたい。
教育課程 （履修案内等への変更事項）	R6年度（2024年度）は第1ターム、第2タームに変更する予定である。

講義名	生活科・総合的学習のカリキュラム開発
担当者名	浅野陽樹、下木戸隆司、島義弘、宮崎幸樹、廣瀬真琴
講義の目標	現職
	ストマス
	<p>共通</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 理論や実践知の獲得</li> <li>2. 理論や実践知を基にした授業や単元等のデザイン</li> <li>3. デザインの共有と振り返り</li> </ol>

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	・20230906講義計画について担当者間で共通理解
講義の工夫点	・昨年度同様、総合的な学習における探究過程に関わる共通学習事項（認知、非認知）を、豆苗の栽培といった共通体験を通して理解を深める講義展開となっている。具体的には、講義前半では児童・生徒の学習時の動機、学ぶ内容、学習の展開等について栽培体験を通して学習し、講義後半ではそれらの体験的な学びを生かしてカリキュラム開発に取り組む。このように、理論 → 具体 → 開発 という流れができている。
プチ・リフレクション	・学生の興味関心に基づいて、総合学習のカリキュラム開発において探究したいことを設定してもらった。その探究を、各自で調べ学習を行ったり、成果を共有したりするなど、ジグソー法を取り入れた活動として展開してもらった。各チームの生産物を、最後、共有する時間を取ったが、それらを自己及び他者評価する視点の設定が不十分だったように思う
次年度の改善点	<p>&lt;廣瀬&gt; 講義前半の理論学習を、後半の開発に接続させるよう、受講生に働きかけをする</p> <p>&lt;宮崎&gt; デザインした指導計画が目標とする（育成したい）資質・能力につながるのか、評価の面から吟味させたい。そのために、総合的な学習の時間の目標設定の在り方についてももう少し踏み込んで指導する必要がある。</p>
教育課程 (履修案内等への変更事項)	・特記事項無し

講義名	特別活動の理論と実践
担当者名	内祥一郎・廣瀬真琴
講義の目標	現職 ・特別活動の事例や特別活動の意義や特色を、多角的に分析できる。 ・集団活動をよりよくデザインする力量を形成する。
	ストマス ・特別活動の意義や特色を理解できる。 ・集団活動をデザインする力量を形成する。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	・teamsのチャット機能を使って随時、打合せ
講義の工夫点	・学部生へ特別活動に関するアンケートを採るため、特別活動について学び、そのアンケート結果を基に各自が特別活動における授業の改善案について提案するようにした。
プチ・リフレクション	参加者は積極的に調べ学習をしたり、自分が学んだことについて発表していたりしていた。しかし、調べる内容について十分な資料の読み込みができていないことと、授業外での取組が多くなってしまったように感じた。
次年度の改善点	・学習指導要領解説の読み込みを十分に行わせ、特別活動の内容について十分に理解させていきたい。また、授業内にその時間を確実に確保していきたい。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	・特になし

講義名	学校の安心・安全と危機管理
担当者名	関山徹・小林俊一郎・黒光貴峰
講義の目標	現職：学校安全・危機管理と心の健康管理に関する知識と対処法について包括的に理解し、組織の中核的な立場から準備・運営・改善ができる。
	ストマス：学校安全・危機管理と心の健康管理に関する知識と対処法の基本事項を理解し、それを組織の一員として協働的に実践できる。
	共通：学校安全・危機管理と心の健康管理に関する知識と対処法を理解し、それを組織的に実践できる。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 20230509：今年度の構成・日程について担当者間で共通理解</li> <li>・ 20231027：内容や授業方式について担当者間で共通理解</li> <li>・ 20231125：担当教員との内容・段取りの確認</li> <li>・ 20231224：担当教員との内容・段取りの確認</li> </ul>
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 関係法令や最新研究の要所を押さえるとともに、学校の具体的場面を用いた演習問題を数多く設定した</li> <li>・ 受講者の毎回のリフレクション・シートに対して、教員がすべてフィードバック（回答）を行った</li> </ul>
プチ・リフレクション	・ グループ討議の場を多く設定したが、時間に追われる回もあった
次年度の改善点	・ グループ討議や演習の内容の精選や見直しを行っていく
教育課程 (履修案内等への変更事項)	

講義名	グループダイナミクスからみた学級経営
担当者名	有倉巳幸、東佑樹（附属中）、中原大士（附属小）
講義の目標	現職 これまでの学級経営をグループダイナミクスの知見から省察した上で、改善プランを提案できる
	ストマス ・学級経営に関して、グループダイナミクスの知見から省察できる
	共通

年	2023（R5）
講義準備や打ち合わせのメモ	・事前にメールにて当日配布する資料の確認を行った。事前打合せについては今年度は、昨年度と担当者が一緒だったので行っていない。
講義の工夫点	今年度も、校則などの規範を中心に、学級経営上の問いを立てさせた。毎回、理論的な知見を提供した後、各自の問いを追究していくためにディスカッションを充実させた。 みなし実務家教員の両名には、後半の授業に参加してもらい、グループダイナミクスに関連した附属の取組の紹介をしてもらったり、学生の話し合いに入ってもらったりして、コメントを頂いた。
プチ・リフレクション	今年度の授業は、6名の受講と例年よりも少ない人数であった。加えて、今年度初めて現職教員学生が受講しなかったため、ストマスのみでの授業であった。ストマスだけだったので、現職教員学生に依存することなく、自身で問いを立ていろいろと自分の考えを表明できたのではないと思われる。以前は現職教員学生から、自身の探究課題においてグループダイナミクスの知見は参考になると言われていただけに、今年度のM1の現職教員学生には、別の担当する授業で情報提供を行なった。授業の後半に毎回行うグループディスカッションは、ストマスだけであったが充実していた。 また、今年度も、附属中の東先生からは、生徒のリーダーシップ育成について、附属小の中原先生からは、学級づくりの実践についてそれぞれ話をもらったが、受講生にとっては、私が行った理論的説明ともリンクしていたようであった。来年度以降も附属の実践とリンクさせられるよう内容の構成を工夫していきたい。昨年度課題として上げたみなし教員のmanaba登録と利用ができていなかったことから、リフレクションを随時見てもらうことができなかった。 今年度から、附属小が主幹教諭をみなし教員に指名してもらえたので、附属小の授業との兼ね合いがなくなったのがよかったと思われる。
次年度の改善点	附属の先生もmanabaに登録し、随時、資料等を確認できるようにしたい。
教育課程 （履修案内等への変更事項）	

講義名	集中講義「学校経営と組織マネジメント」NITS・南九州プラットフォーム合同セミナー活用
担当者名	小林俊一郎・小屋敷浩昭
講義の目標	現職：組織マネジメントの考え方や進め方について基本的な理解を深める。特色ある学校づくりや学校組織、教員集団をマネジメントできる力を身につける。
	ストマス：組織マネジメントや学校経営に関する基本的な理解を深め、学校運営に積極的に参画しようとする意欲を高める。
	共通：本授業は、組織マネジメントの本質を理解するとともに、特色ある学校づくりに積極的に取り組むことのできる実践的・専門的力量を身につけることを目指す。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 20230605：本年度の進め方について教員会議で共通理解「</li> <li>・ 202307月～8月：NITS・南九州プラットフォームコラボ研修講師選定</li> <li>・ 202310月～11月：講師(オンライン講座) 15人との打合せ・依頼送付</li> <li>・ 20231220：院生対象の第1回講義</li> <li>・ 20231223～25：コラボ研修実施(第2回～第13回)</li> <li>・ 20240109：コラボ研修を通しての議論</li> <li>・ 20230110：院生対象まとめ</li> </ul>
講義の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コラボ研修前後においては、校長経験者の実務家教員が実際の学校経営について具体例を挙げながら説明した。</li> <li>・ ミドルリーダーマネジメント能力育成プログラムとして学校現場の職員集団づくりに資する内容となるよう講師選定を慎重に行った。</li> <li>・ リドルリーダーとしての視点や理論と実践の往還の重要性について再認識できるような授業構成とした。</li> <li>・ 鹿児島・熊本両県の教育関係者に周知し、講師や意見交換が円滑に進められるようにした。</li> </ul>
プチ・リフレクション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ コラボ研修の日程確定が10月となるため、授業日の周知が遅くなり受講する院生が7名にとどまった。</li> <li>・ コラボ研修及び実務家教員の学校経営に関する講義は、「とても役に立った」と好評であった。</li> <li>・ 鹿児島大学及び熊本大学によるプラットフォームであり、隔年後とに大学が担当を輪番で行うため、担当大学によりコラボ研修の進め方が異なるため単位認定等について予め学内で検討しておく等の工夫が必要である。</li> </ul>
次年度の改善点	令和6年度のコラボ研修は熊本大学であるため、計画提示に沿って内容の再構成等を検討する。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	熊本大学から提示される計画を基に本学の授業計画を立てる必要がある。

講義名	授業研究の理論と実践
担当者名	廣瀬・溝口・徳田(~2022)、内(2023~)
講義の目標	現職：授業の観察・分析を緻密に行うとともに、授業検討会における議論を的確に整理し、討議を円滑に進めるファシリテーターとしての役割を果たすことができる
	ストマス：授業の観察・分析を的確に行うとともに、授業検討会においても、その趣旨や進行方法を理解して、討議の中心課題をふまえた授業改善のための議論を行うことができる
	共通：なし
年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	<次年度に向けて> ・対面での実施とし、必要に応じて遠隔を取り入れることとした ・今年度の講義計画や主担当部分について確認した
講義の工夫点	・1タームの講義であるため、文献の読み方や資料収集、整理の仕方など、基礎的な指導・支援も行うようにしている ・多様な文献を教室後方に並べ、院生各自のテーマに基づいて調べ学習が進められるよう環境を整えた
プチ・リフレクション	・今年度、初めて、模擬授業を行った後に授業研究会を実施したチームが登場した ・模擬授業のデザインや授業研の実施、振り返りにわたり、ストマスは現職からたくさんの示唆を得た一方で、実際に子どもを観察していない授業研究会でよいか、担当者間で検討を行った
次年度の改善点	・上記のリフレクションを踏まえ、以下のように改善を図ることとした ①授業研究会のデザインに基づき附属小中で授業の動画撮影 ②コンピテンシーベースで教科や学校種を超えた学びあいが成立する志向性を有したデザインとなるよう指示 ・その他・・・レポートのフォーマットに参考文献の項目を追加する
教育課程 (履修案内等への変更事項)	・特記事項なし

講義名	いじめ・不登校の組織的対応
担当者名	有倉巳幸・関山 徹・島 義弘
講義の目標	現職 いじめや不登校について、組織的な視点から問題の理解や対応について考えることができるとともに、学校や学校外の人々と効果的な連携のあり方を考えることができる。
	ストマス いじめや不登校について、組織的な視点から問題の理解や対応について考えることができる。
	共通

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	・メールにて、事前に何度か打合せ
講義の工夫点	・急遽、オンラインで実施したが、グループ活動については、google jamboardやmanabaのスレッドを利用してディスカッションを可視化させた。
プチ・リフレクション	担当者が感染症のため、対面実施が叶わなかったこともあり、オンラインで実施することになった。スケジュールの都合から担当者全員が参加する回数が少なかったが、学生にはそれぞれの専門の立場から情報提供できたと思う。
次年度の改善点	・昨年度までは、他大学の著名な先生をゲストティーチャーを招いて4コマ実施していたが、今年度は予算の関係から実施できなかった。次年度は再び招聘したいと思う。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	・今年度同様3月上旬で実施予定

講義名	発達障害の医療と支援
担当者名	橋口 知
講義の目標	現職：これまでの教育と医療等との連携協働の実践を振り返り、より適切な支援を挙げることができる。
	ストマス：発達障害医療に関する知識を整理し、具体的な教育的支援を挙げることができる。
	共通： 1 発達障害の医学的概念を説明することができる。 2 各発達障害に対する医療的支援を述べるすることができる。 3 医療と教育の円滑な連携方法を説明することができる。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	受講生と使用教材を事前検討し、教科書を受講生の希望で自己購入した。
講義の工夫点	形態：受講生1人。対面授業。 工夫点：教科書を使用し、毎回の資料作成の負担を軽減して、教科書内容に応じた受講者の実践からの疑問点について検討するとともに、不定期に宿題を課すことによって新規視点を持つように働きかけた。
プチ・リフレクション	院生の様子：受講者1人で、授業時間は毎回、熱心に取り組んでいた。 準備した資料：受講者の要望に応じた教科書や参考資料を準備した。 学習活動：授業前学習において生じた疑問点について調べた上での受講を促したり宿題を導入したりすることによって探究学習を意識させた。前年度と同じ教科書を用いたが、「特別支援教育開発実践実習I」の内容変更によって医療と教育の連携についての現場実習が殆ど無くなった影響から、理論と実践の往還の場が殆どなく、前年度よりも表面的な理解に留まり、新規視点の創出が十分ではなかった。
次年度の改善点	「特別支援教育開発実践実習I」の内容を再変更して、本授業との関連付けをより深く行う予定。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	特になし。

講義名	心身障害科学
担当者名	橋口 知
講義の目標	現職：これまでの特別支援教育実践を振り返り、より適切な支援を挙げることができる。
	ストマス：各障害の基本的知識を整理し、具体的な教育的支援を挙げることができる。
	共通： 1 心身の障害について、教育及び保健福祉医療における概念を説明することができる。 2 各障害のからだところの構造や機能の特徴を述べるすることができる。 3 各障害に対する支援を具体的に挙げることができる。

年	2023 (R5)
講義準備や打ち合わせのメモ	受講生と使用教材を事前検討し、教科書は受講生希望で自己購入した。
講義の工夫点	形態：受講生 1 人。対面授業。 工夫点：受講生が現職教員 1 人のため、本人の学習希望内容に応じた教科書を使用することによって資料作成の負担を軽減し、教科書記述内容に対する受講者のこれまで実践における疑問点について主に検討した。
プチ・リフレクション	院生の様子：受講者 1 人で、授業時間は毎回、熱心に取り組んでいた。 準備した資料：受講者の要望に応じた教科書や映像を含む参考資料を準備した。 学習活動：授業時間に教科書内容や過去の実践をもとにした検討は行えたが、予習を含めた授業時間外の自学自習の促進に課題を感じた。
次年度の改善点	経験の異なる複数の院生が受講予定のため、教科書は指定するが、各自の実践の振り返りを中心に行う予定。
教育課程 (履修案内等への変更事項)	教科書を事前指定。

## 5 教育相談Day

教育相談Dayとは、学生一人一人に対して面談の場を設定し、学習の状況や環境について話し合うことによって、学生の学びを深めるとともに、教職大学院の教育改善に役立てる取組である。学生一人につき30分間程度、教員2名で行う形式を基本とし、次の日程で実施した。

### <実施日及び対象>

基準日を設けているが、調整を要する場合1か月以内に実施することとした。

第1回：6月5日～22日（1年生 20名）

第2回：12月4日～7日（1・2年生 22名）\*2年生は小免プログラムの学生

面談記録をもとに、話題にのぼった事柄を分類した上で集計したものが、下表である。各学生の学習上の関心内容や困りごとについて語り合うだけでなく、要望事項や学びの手応え等についても聴き取った。

12月の教育相談では前期の学生のGPAを基に、特に成績の振るわなかった学生に対して丁寧な聴き取りを行った。12月は、2年目の授業や実習に関する質問が多かった。また、授業や実習等厳しいスケジュールの中でも「明確化」「楽しい」「充実」「多くの学び」など、前向きなワードが増えた。

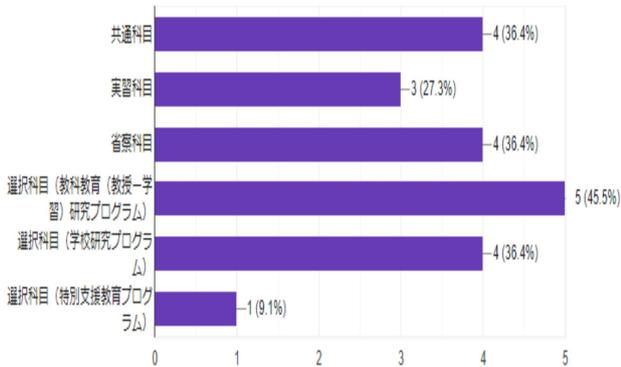
話題の分類項目		6月	12月	内容（一部）
学習面	授業について	7	8	レポート課題の作成状況、討議形式による充足感、特別支援教育講座からの学び、自身の専門分野に関する深い学び
	実習について	19	18	授業者同士の連携の大切さ、各実習の差異、検証授業への意欲と不安、目標設定の難しさ、M2の実習先や進め方
	探究課題について	11	11	テーマ決定までの迷い、副テーマの進め方、勤務校での探究継続の意欲と不安
	学習環境について	1	2	ICT、テキストマイニング等の情報提供の要望
	院生同士の協働について	5	4	院生同士の有益な交流、充実感、支え合える良好な関係、楽しい
	全般的な学びについて	3	6	授業や実習による多様な考えの学び、論文精読や討議等による解釈力の体得、実習経験による同僚性の学び、質的・量的研究についての学び、課題の明確化
その他	心身の状況について	8	17	自身や家族の体調、睡眠状況、ストレス、自身の性格
	生活の状況について	18	11	生活リズムの安定化、アルバイトの内容、通学方法、授業と仕事のバランス
	勤務校との連携について	2	4	探究テーマの継続の可否、次年度の担任や分掌の希望
	進路・今後について	10	13	教採の受験校種・教科・合否、他県教委との連携の有無

※ 数字は内容別の件数

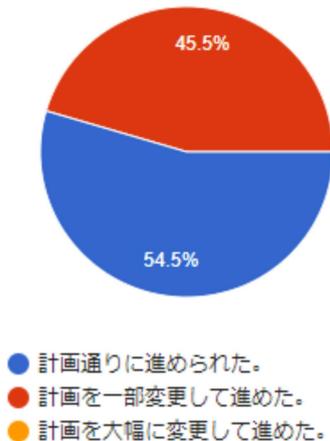
6 教職大学院授業担当者アンケート (11名回答)

授業を担当している教員に授業者としてのふりかえりを促し、研究科全体としての教育改善の視点を得るため、9月及び学年度末にアンケートを実施している。

(1) どの科目群を担当されましたか。



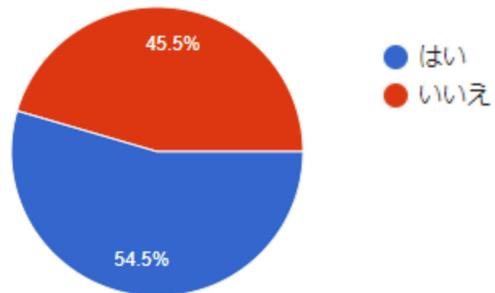
(2) 授業は計画通りに進められましたか



(3) 授業を担当しての感想 (例 教職大学院と修士課程の違い) や、授業で工夫された点や難しかった点 (計画変更の理由も含む) があれば記入ください。  
(自由記述のため割愛)

(4) 教職大学院の学生の実態について気づかれたことがありましたら、記入ください。(例 教職大学院の学生の強みや課題、修士課程の学生との共通点や相違点など)  
(自由記述のため割愛)

(5) 本年度は教職大学院の指導チームで2年生を指導されましたか?



(6) (5)で「はい」と回答された方にお尋ねします。指導チームを担当しての感想 (例 教職大学院と修士課程の違い) や、研究指導などの面で工夫された点や難しかった点があれば記入ください  
(自由記述のため割愛)

(7) 教職大学院の授業や教育課程、指導の在り方、学生募集等について、ご意見やご要望がありましたら、お寄せください。

## 7 オープンクラス（相互授業参観）

### (1) 目的

- ・ FD 活動の一環として行い、「教職大学院設置計画書」内の FD に関する記載への対応をさらに充実させる。
- ・ 教職大学院だけでなく、教育学部教員にも参観を呼びかけ、授業改善に関してより多様な見地からの検討ができるようにする。

### (2) 実施期間

第 1 回 6 月 27 日～7 月 7 日

第 2 回 11 月 28 日～12 月 1 日

### (3) 実施方法

- ・ 参観者は、教育学部院及び教職大学院教員
  - ・ 原則として、期間中すべての教職大学院の授業科目を参観可能
- ※ 学内外の学生にも広く公開している。